

後

入学試験問題

総合科目Ⅲ

(配点一〇〇点)

平成二十一年三月十三日 九時三〇分～一一時三〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手をあげて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
- 五、二枚の解答用紙が渡されるが、解答は、問題ごとに所定の解答用紙に記入しなさい。
- 六、各解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所、第二面一箇所)、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 七、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 九、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 一〇、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 一一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章は、フランスの著名な歴史学者アラン・コルバンに対して、その新著における歴史記述の方法論を中心に行つた、インタビュー記事である。これを読み、後の問いに答えなさい。

原題を直訳すると『ルイ・フランソワ・ピナゴの再び見いだされた世界——無名の男の痕跡』。北部フランスの貧しい村で木靴職人をしていたピナゴという男性を扱っている。

「私の試みは、一切の痕跡を残さずに死んでいった普通の人々に、個性を与えることができるかという問いに答えようとしたものです」とコルバン氏は話す。

「社会史の多くは、手紙や日記、回顧録など自ら記録を残そうとした人々の記述や、罪を犯したり革命に加担したりして残った裁判記録を材料にしています。しかし彼らは一般大衆とは異なるカテゴリーの人たちです。本当の意味で民衆の社会史を著すことにはなりません」

話題にならず、罪も犯さず、歴史の底に埋もれてしまう無名の人物の歴史を書きたかった、という。

コルバン氏は一九三六年生まれ。パリ第一大学(ソルボン)教授で、十九世紀史を担当している。政治史や事件史中心の旧来の歴史学に対し、人々の日常生活から歴史の深層を探ろうとするフランス・アナール学派の継承者の一人。

一九九五年五月、故郷に近いノルマンディー地方の公文書館で、コルバン氏は「無作為に」一つの村を選んだ。続いて、その村の出生届の記録から「無作為に」二人の男性を抜き出した。その一人が一八七六年に七十八歳でなくなったピナゴだった。彼の教区の保存文書を調べ、徴兵記録、税金の記録、土地の記録、いさかひの調停記録などを探しあてた。

「ピナゴは森のはずれに住んでいた。文字は読めなかった。生涯同じ村で暮らした。子供は八人。奥さんには先立たれている。極貧者のリストに載っていたが、牛を二頭持っていた。十七歳と七十二歳の時にプロシア軍が村に侵入した。これが生涯で最大の事件でしょう……こうした細部が私のバーチャルなスクリーンの上に並んでいたのです」

親類縁者や、周囲に住んでいた数十人を調べ、ピナゴの周辺をあぶりだしていった。当時の村人の取引記録や、子どもたちの話し方、声の記録などにもあたった。「晩年、請願書に記した十字架の印が、彼の残した唯一の痕跡かもしれません」

これだけの記録が残っているフランスにも驚かされる。

「ピナゴは当時の貧困層を代表する人ではありません。彼が選挙に行ったかどうかはわかっても政治的意見はわからない。主観には立ち入れないのです。またグローバルな意味で当時の農村社会史を描くことでもありません。言ってみれば、当時を探る一つのツボなのです」

「歴史学は不幸や苦痛、苦悩を特権視する傾向がある」というのがコルバン氏の持論だ。その意味で、「何も起こらなかった人の歴史」は、メインストリームの社会史、歴史学へのアンチテーゼなのだろう。

昨年邦訳が出た『人喰いの村』では、むごたらしい虐殺事件が起き、たくさんテキストを生みだした一つの村を舞台に歴史を描いた。今回の本は、異常性、事件性がなく、テキストも生みださなかった人々という点で、対称的な存在になる。

「感性の歴史」を研究し続けているコルバン氏にとって、歴史を、過去の感性を「わかる」とはどういうことなのだろう。同時代の人々の感性ですら「わからない」ことが多いのに。

「私にとって、過去の感性が『わかる』とは、さまざまなオブジェを見つけ、組み立て、そうやってその時代に生きた人々の皮をかぶる『こと』を意味します」

八二年に出版した『おいしい歴史』では、華麗なパリやベルサイユをおおっていたすさまじい糞尿と香水と汗の臭気を活字で再現して話題になった。

その時代の音、におい、人々の好みを探る。しかしそれらは、必ずしもテキストとして明文化されてはいない。「歴史学は残されたもの、記録のあるものを材料に組み立てる仕事です。しかし、書かれていないからといって、人々が経験していなかったと言えるのでしょうか」

「たとえば、現代人の多くはわざわざ日記に自動車の騒音について書かないでしょう。あまりにも当然のことだからです。し

かし西暦三千年の歴史学者が二十世紀末の人間の感性を調べた時、記録がないからといって『街のなかに騒音がなかった』と主張したら間違いをうんでしまいます。日記や手紙にはレトリックのワナがあります。しかし、ピナゴの歴史にはそれがありませんでした」

木靴職人が生きた寒村には今だれも住んでいない。「パリっ子のバカンスの場」になっているという。

「もし来世というものがあって、私がピナゴと会ったら、彼はとても驚いているでしょうね」

(一九九八年三月一七日付け、朝日新聞夕刊に掲載された、インタビュー・構成 〓 刀祢館正明による「フランスの歴史家アラン・コルバン氏に聞く」より。なお掲載時の小見出し、写真は省略した)

問一 傍線部①について、次の(1)(2)の問いに答えなさい。

(1) ピナゴが十七歳の時に、プロシア(プロイセン)軍が村に侵入したが、この事件に関連するヨーロッパ規模の史実について説明しなさい。

(2) ピナゴが七十二歳の時に、プロシア(プロイセン)軍が村に侵入したが、この事件に関連するヨーロッパ規模の史実について説明しなさい。

問二 傍線部②と関連して、一切の痕跡を残さずに死んでいった普通の人々に個人性を与えるという、コルバンの試みについて、あなたはどうか考えますか。賛成または反対の立場から、具体的な理由をあげて一〇〇〇字以内で論述しなさい。

第二問 次の文章は、人間の用具使用の功罪の臨界点に関する考察をうけて、記号使用の功罪の臨界点について考察したものである。これを読み、後の問いに答えなさい。

身のはたらきを強化・拡大するもう一つの仲だちは記号です。記号を身のはたらきに組みこむことによって、われわれは表現機能を拡大してきました。とくに人間は言語を使うことによって生活世界そのものを拡大してきました。われわれが言語をもたないとすれば、まったく直接的な身体表現レヴェルでの伝達しかできないでしょう。それでは多くの事柄を伝えることはできないし、伝える間に変形する度合いも大きいでしょう。知識を長く保持することも困難です。われわれは言語をもつことによって経験を蓄積し、共有することができます。われわれの経験をふりかえってみても、言語や記号を媒介にした情報経験が大部分です。それによって人間は、現に自分が経験している世界だけではなく、誰かが経験している世界、誰も経験していません。もありうる世界、またかつてあった世界、未来にあるであろう世界にまで自分の世界を拡大しました。

記号、ことに言語は、われわれに内在しているかにも見えるほど、身体化されていますが、言語を身体化し、組みこむことは、逆にいえば、われわれが言語の統辞論的構造や論理によつて支配され、組みこまれるということです。だから言葉ではいい尽くせないとか、不立文字ということをいったりします。これは言語構造の網の目にはかからないものがあることを意味しています。

われわれは周りを海に囲まれていますから、魚の名前は非常に豊富です。出世魚というように魚の成長段階によつて別の名前がついていたりします。牧畜民の言葉では、日本人がこまかく分けている多くの魚を一つにまとめてしまっています。恐らくわれわれほどこまかく魚を見分けていないのでしょう。逆にわれわれは羊をこまかく見分けることができません。大ざっぱに「羊」でまとめています。これは単語レヴェルの問題ですが、構造レヴェルの問題があります。リニアな言語構造ではとらえられない現実があります。われわれはそれをたとえば絵画記号であらわしますが、それ自体一つの限定です。

こうして記号は、われわれが世界を経験する仕方を拘束するフィルターの役割をします。だがそれだけなら昔からあった問題です。今日の問題は、記号を仲立ちとする情報経験が、現実の代理ではなく、現実そのものとなったという点にあります。われわれの日常経験をふりかえってみても、現在では直接経験よりもむしろ情報経験の方が圧倒的に多いのに気づきます。毎日家庭や職場で経験する直接経験は、確かな世界経験です。それに対して情報による間接経験は不確かな擬似経験であるとして、これまで低い価値しか与えられませんでした。百聞は一見にしかず、というわけです。しかし現代では、われわれが直接経験しない情報経験が量の面で圧倒的に多いというだけでなく、質的にも情報経験が直接経験以上に日常生活にとって大きな意味をもつようになっていきます。

サウジアラビアのパイプ・ラインが爆破されたと伝えられれば、たちまち株が上がったり下がったりします。中東戦争がつかば石油の供給が不足し、値上がりして、たちまち他の物資の供給不足と値上がりをまねくでしょう。しかしそれは元はといえば、情報経験にすぎません。オイル・ショック、ニクソン・ショックもそうでした。現在ではアメリカの大統領の権力と財力をもつても情報をも一つ一つ確かめ、直接経験することなどできはしません。われわれはすでに情報経験を一次的経験として生かしているのです。

しかし情報経験は内実をともなっているとはかぎりませんから、虚偽の情報も現実となることもありえます。トイレット・ペーパー騒ぎ(注一)は、まさにそうした情報パニックでした。もう一つの問題は情報経験があまりにも増大することによって、われわれは情報洪水に溺れてしまうということです。情報洪水のなかでどのように情報を選んでいいかわからない。与えられる情報があまりにも少ない場合には、確かに自由がない。これまでわれわれは情報が多い方がいいと思ってきました。ところが、情報の数があまりにも増えるともう選ぶことができない。トフラー(注二)がいうように過剰選択は不自由に通じます。情報がわれわれの受容能力を超えると、われわれは錯乱状態に陥るか、そうならないために自閉します。

さらにさきにも述べたように、情報経験が現実のかわりをするようになると、われわれは直接経験よりもむしろ間接的な擬似経験にもとづいて生きるようになります。しかし情報経験には、直接経験がもつような直接性というか、身に迫る力がありませ

ん。直接経験には直接性のほかに、深さの次元があります。多重性、多層性があります。それに比べれば情報経験は、はるかに表層的です。そこで人工的な膜をへだたせて世界と接触しているといういらだたしさが残ります。

真偽不定の情報経験によって構成される現実、受容能力を超える過剰な情報刺激、間接経験による疎隔された世界体験、これらがいずれも精神病理学的な病候とどこか似ているのは不気味なことです。われわれは記号を介する情報を駆使することによって、強力な文明をきざいてきました。しかし現在では、逆にその情報によって支配され、疎外されはじめています。これもまた人間の利点がマイナスに転ずるといふ難問であることはよいに見てとれるでしょう。

臨界点は、用具や記号によって作り出される世界と、地球環境の有限性との衝突から、あるいは人間の自然的身体がもつ諸条件との衝突から生まれます。したがって臨界点を回避できるか否かは、一方では人間が作りつつある世界のイメージと構造を臨界点に達しないよう変えることができるかどうか、他方では、地球環境と地球外環境の限界を臨界点に達しないような仕方でのりこえ、また自然的身体の諸条件を拡張することが可能かどうか、にかかっています。

今は最後の問題だけに話をかぎりましょう。自然的身体は文明の発達にもかかわらず、ほとんど変わっていないともいえません。しかし他方では、われわれの具体的な生き身は、すでに文化的身体であることに注意しなければなりません。そして近代文明は、ある面では身体を解放しましたが、別の方向線上にある可能な文化的身体を抑圧したことも事実です。オリンピック競技だけが、つまり秒コンマをあらそい、跳躍距離や、もち上げる重量を競うという量的拡張だけが、自然的身体の諸条件の拡張ではありません。ヨガの修業は、別な拡張の可能性の一つを示しているといえるでしょう。そもそもわれわれは、自然的身体の可能性をくみつくしているかどうかさえあやしいものです。

さらに記号の仲だちに話をかぎりましょう。われわれが昔の人に比べれば、圧倒的に記号によって構成される情報世界にとりかこまれていることは事実です。情報経験が内実をとまわらないことがあることも事実です。しかしわれわれの生活を構成している現代の世界をどちらがよりよく表現しているか、と問えば、話は簡単ではなくなります。昔の方がよりよいとは、控え目に考えてもいえないでしょう。現代の世界は、直接経験ではとらえきれない複雑さと抽象性をもっています。それを表現する抽象

的な記号情報を実感できないことが、疎外感の原因だともいえます。

かつて私は、想像的なものを感覚化するところまで、シンボル化の能力を拡張・深化することが必要だ、と書きました。現在ではますます記号を実感し、記号や情報によってもたらされる抽象的・想像的世界を感覚化する能力が必要になってきているように思われます。ただこれが、現在すでにみられるように、記号の表面性に感覚を矮小化し、直接経験を情報経験の表面性・一次元のレヴェルでしか実感しないという感覚の貧困化を意味するなら本末転倒です。われわれにとつて必要なのは、感覚の拡張であり、記号経験と直接経験の多重性を貫通する感覚の深化です。記号経験と直接経験の間を往き来し、交通する多次元感覚の(並置ではなく)立体化なのです。古典的な(思考と感覚の二分法をこわす、というよりは、両者を貫通し、往来することです。これは新しい課題ですが、ジョン・ダン(注三)にみられるような形而上学的感覚は、こうした貫通の古典的な試みであったともいえます。われわれは新しい課題を新しい仕方で解くことを考えると同時に、過去の試みの意味を新しい課題に即して、見直し、再評価することを求められているのではないのでしょうか。

(市川浩『(身)の構造』より)

(注一) 一九七三年、第四次中東戦争が勃発し、湾岸産油国の原油価格引き上げと禁輸措置によつて原油価格が高騰した(オイル・ショック)。日本では、それを受けた狂乱物価、便乗値上げの中で、トイレット・ペーパーの買いだめ騒動が起つた。

(注二) 一九二八年生まれのアメリカの未来学者。

(注三) 一六〇一七世紀のイギリスの神学者で、「形而上学的詩人」として著名である。

問 この著述は、コンピュータが日常的ではなかった、一九八〇年代初頭になされた。今日では、コンピュータ技術の発展によつて、仮想世界にひたることが多くなり現実世界での人間関係が希薄になることや、コンピュータゲームが提供する仮想的な世界や匿名による電子的コミュニケーションでは、現実世界では許されないこともできてしまうことが、問題とされている。情報社会における世界経験のあり方について、情報経験と直接経験の関係に関する当時の著者の問題意識や主張と、現在の状況を対比させながら、一五〇〇字以内で論述しなさい。